

C型慢性肝炎のインターフェロン療法における口腔症状の検討

永井, 清志

<https://hdl.handle.net/2324/1500618>

出版情報：九州大学, 2014, 博士（歯学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（2）

氏名	永井 清志			
論文名	C型慢性肝炎のインターフェロン療法における口腔症状の検討			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	中村 誠司
	副査	九州大学	教授	森 悦秀
	副査	九州大学	教授	清島 保

論文審査の結果の要旨

近年、C型慢性肝炎に対して、ペグインターフェロン（Peg-IFN）にリバビリン（RBV）とテラプレビルを加えた3剤併用のインターフェロン（IFN）療法が行われている。このIFN療法はその有効性が示されるものの、口腔内に不快な症状が生じることが報告されている。本研究では、第一にこのIFN療法で生じる口腔内病変を調査し、第二に主な口腔内副作用である味覚障害と口渇感の発症要因について検討を行った。

第一の研究では、2012年1月～6月にIFN療法を行った50例を対象とし、12週までは3剤を併用し、13～24週はPeg-IFNとRBVの2剤だけを併用するという投与スケジュールとした。治療期間と治療終了後24週まで、味覚障害、口渇感、口腔粘膜疾患、および血中ヘモグロビン濃度を調査した。その結果、味覚障害は78.0%、口渇感は80.5%にみられ、3剤の併用投与が終了する12週前後が最も発症頻度が高く、治療終了後は徐々に改善した。口腔粘膜疾患は口内炎が23例（33病変）でみられ、その内訳はアフタ性口内炎15例、口角炎10例、口腔カンジダ症7例、口腔扁平苔癬1例であった。いずれも治療後は治癒したが、口腔扁平苔癬は約1年半、他の口内炎は4週を要した。血中ヘモグロビン濃度は治療開始後12週で著明に低下し、その後は徐々に上昇し、治療終了時には元の状態に回復した。

第二の研究では、2013年2月～7月にIFN療法を行った11例を対象とし、3剤併用投与期間である12週間の味覚障害、口渇感、口腔粘膜疾患、安静時と刺激時唾液分泌量、倦怠感、食欲不振、皮疹、および血中ヘモグロビン、血清亜鉛、血清鉄の濃度などを調査した。その結果、味覚障害10例、口渇感10例、口内炎3例、倦怠感9例、食欲不振8例、皮疹10例がみられた。安静時の唾液分泌量、血中ヘモグロビン濃度、および血清亜鉛濃度は相関を示し、いずれも治療開始後12週では治療開始前よりも有意に低下していた。

以上の結果より、IFN療法中は、血中ヘモグロビンとともに血清亜鉛が減少することによる味覚障害と薬物性口腔乾燥症による口渇感が生じることが示唆された。

本研究によりIFN療法中には味覚異常と口渇感が生じることが判明し、これらに対して的確な対症療法を行えば、患者のQOLを改善できることが示された。このように、臨床的に重要な知見を得ており、博士（歯学）の学位授与に値する。